

## 平成20年度分担研究報告書

がん患者・家族のQOL向上を目的とした総合相談や情報提供のあり方に関する研究

研究分担者 高田 由香 静岡県立静岡がんセンター よろず相談 主幹技師

## 研究要旨

インターネットの普及などで、患者・家族も様々な情報を自ら入手することができるようになってきたが、その一方で本当に自分が求めている正しい情報にたどり着くことも難しくなっているといえる。利用者が相談支援センターに求める情報とは何かを分析し、収集・蓄積した情報ツールをうまく活用することで総合相談の質が向上するものと考えられる。

## A. 研究目的

近年、がん医療の領域における情報提供システムは、がん対策情報センターを中心に充実し、社会的にも広がりを見せている。特に病気の診断や治療に関する情報提供ツールは充実してきている状況である。しかし第一段階の治療を乗り越えた患者・家族は、がんと共にしながら生活の再構築を施行するなかで直面する新たな不安や課題を抱えている。それらを克服するために必要な情報提供や総合相談のあり方を相談支援センターでも意識する必要性を感じている。そこで今回は利用者のQOL向上を目的として、利用者のニーズ把握、理解度、利用者層を総合的に評価する事により、これまで継続してきた学習会形式の情報提供について再度評価・検討を行うことを目的とする。

## B. 研究方法

学習会は平成16年11月より実施し、平成20年度も月2回(同一内容)計23回開催し、参加者アンケートを実施した。また前年度に参加者の関心の高かった講義内容を一部継続し、さらにあらたな内容を加え、参加者のニーズに即したより専門的な情報提供を心がけた。

(倫理面への配慮)

アンケートは、集計内容の比較を可能にするため昨年と同形式を使用。参加者の匿名性を重視した上で、属性や感想、現在の悩みなどを聴取する質問項目とした。

## C. 研究結果

平成20年4月から平成21年3月まで、計23回の学習会を企画・運営した。参加者は延べ493名。テーマごとの参加状況を見ると「つながる緩和ケア」計44名、「がん治療をたすける口腔ケア」計40名、「がん向き合うところ」計65名、「画像

診断装置と検査の特徴」計33名、「リンパ浮腫のケアやリハビリテーション」計42名、「がんの痛みは我慢しない」計35名、「新しい薬ができるまで」計16名、「がんと食事」計72名、「がんと感染症」計39名、「うつかもしれないと思うとき」計41名、「医療費控除のしくみ」計35名、「副作用に対するケア」計31名(1回開催)という結果であり、1回あたりの参加人数21人と昨年度(H19年度:26人)より減少している事がわかった。

## D. 考察

参加者の傾向は計493名中、男性が28%、女性が72%と、女性の方が2.6倍と参加が多かった。実施したアンケートの回収率は67%、アンケート回答者の男女比では男性27%、女性72%であった。回答者の年齢は「40~50歳代」40%、次いで「60~70歳代」39%、であった。また「本人」40%、「配偶者」26%、「子供」9%の順であり、患者本人が主体性を持って参加している状況が、昨年同様に確認された。学習会内容の理解度についての質問では「理解できた」「少し理解できた」と解答した人は回答者の98%にのぼった。また悩みや関心についての質問(複数回答)では「精神的な悩みやこころの問題」が80名と最も多く、次いで「症状・副作用」73名、「在宅での療養・ケア」65名、「緩和ケア」65名となっている。静岡がんセンターが開院して6~7年目の年度であり、新患よりも再発・転移あるいは終末期を迎えた時期の患者層が多くなっていることから、興味関心も徐々に概念的なものから「治療継続に伴う課題」や「生活維持に関する問題」、あるいは「精神面やこころの問題」と変化してきていると考えられる。

## E. 結論

学習会の参加者は、主体的に病気との共生を思

考している方が多く、意欲的な学習態度が伺える。また病状や精神面では安定しているが、それでも漠然とした不安や再発・転移の恐れを常に抱えながら生活している事がアンケートの結果からも確認できた。今後は安定した心身の保ち方や予期不安に対する対処方法など、講義形式にとらわれず参加者同士の意見交換なども取り入れながら、参加型の学習会へ発展させていくことが課題である。

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

- ・がん医療における医療ソーシャルワーカーの役割：  
医療、国立医療学会、東京、558-565,2008. 10. 20
- ・がん患者は理学療法を必要としているのか？：  
理学療法ジャーナル、医学書院、東京  
941-944,2008. 11. 15

##### 2. 学会発表

なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

分担課題名: こどものケアに関する相談支援のあり方の研究

研究分担者: 大曲 睦恵 施設名: 静岡県立静岡がんセンター 職名: 研究所 任期付研究員

研究要旨

治療が第一命題である入院環境において、小児がんのこどもの不安やストレスを軽減し、その子なりの認知的・情緒的・社会的発達が滞らないよう、遊びを通じて支援を行う。また、小児がんのこどもを持つ家族が安心できるよう、多職種医療チームの一員として家族中心ケアを提供する。さらに、がんに罹った親をもつこどもにも遊びを介したアプローチをし、そのこどもが家族中心ケアに含まれるよう支援する。

A. 研究目的

小児がん患者・家族のこころの安定をはかるため、また、家族をがんで亡くすこどもへの支援環境を整えるために、チャイルド・ライフ・スペシャリストの専門性をいかし、心理社会的サポートを中心とした介入を行い、事態を把握し、ニーズを分析しながら、介入手法を研究開発すること。また、親を亡くしたこどもを対象としたグリーフ・ケアについても、チャイルド・ライフの理論に基づいた介入をすること。

B. 研究方法

おもに小児科医と連携した面談から始め、本研究の研究費から購入したおもちゃや工芸材料などを用い、こどもとその家族との信頼関係を築くとともに、それぞれのこどもの認知的・情緒的・心理社会的発達のアセスメントを行った。それによって得られた情報(こどもとその家族のニーズやそれぞれのこどもに適したアプローチ法など)を医療チーム内でカンファレンス等を通じて共有し、有益なリソースとして活用した。

(倫理面への配慮)

個人情報の取り扱いに関しては、本研究では介入は日常診療に基づいており、よって個人情報の取り扱いについても通常診療の範囲内で十分な倫理的配慮がされていることが前提にある。なお、本研究に当たっては厚生労働省の臨床研究に対する倫理指針を遵守し、介入に当たっては対象者(未成年者の場合は親権者)の同意を充分確認するものであり、データ整理時には個人情報を匿名化するものである。

C. 研究結果

病院環境の中においてもおもちゃや遊びの場を提供することで、こどものノーマライゼーションがはかられ、同時に医療スタッフやこどもの

家族などからもチャイルド・ライフのアプローチに対して肯定的な評価を得られている。また、このような関わりを多職種と連携して共同で学会等で積極的に発表している。

親を亡くしたこどものための遺族会に関しては、試みを始めてから4年が過ぎ、毎年に参加人数はそれほど多くはないものの、親を亡くすという大きなライフイベントを体験したこどもたちが、親が亡くなった病院に来て、遊びという怖さの少ない方法を介しこのライフイベントを消化していく貴重な場になっていると各職種からのフィードバックを受けている。

D. 考察

従来の日本の病院システムには存在しなかったチャイルド・ライフ・スペシャリストの介入に係る本研究は、入院中のこどもとその家族の心理社会的支援へのニーズや、親を亡くすこどもを

対象としたグリーフ・ケアへのニーズを浮き彫りにした。治療を行う上でのケアの輪の中に、患者本人であるこどもを入れること、同様に、成人患者のこどもも蚊帳の外に置くのではなくケアの輪に入れることにより、こどもが主体性をもって治療に向き合い、あるいは親を亡くす事実に対する心の準備をもって臨むことができる一助になると考えられる。

#### E. 結論

当院ではチャイルド・ライフ・スペシャリストの介入の必要性を理解する多職種医療チームが円滑な連携を展開しつつある。これを継続し、こどもとその家族中心の質の高い医療を提供し、更に高い次元へと発展させることが今後の重要な課題である

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

なし

##### 2. 学会発表

平成20年7月4日第13回日本緩和医療学会  
学術集会

シンポジウム：家族ケア・グリーフケア：  
「家族の悲しみ」の理解を深めるために

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

##### 1. 特許の取得

なし。

##### 2. 実用新案登録

なし。

##### 3. その他

なし。

分担課題名：WEB 版がんよろず相談システムの活用に関する研究

研究分担者 田代 英哉 大分県立病院 副院長兼がんセンター所長兼外科部長

研究要旨

今後のがん相談支援体制への課題を明確にすることを目的に、当院のがん相談支援センターに寄せられたがん相談の内容や活動状況の分析を行った。その結果、がんに関する多様な分野での相談が寄せられていること、がん相談支援センターでのがん相談は相談者の困りごとや悩みに対しての解決に貢献していると考えられた。

今後は情報提供への即時の対応のために、静岡県立静岡がんセンターの WEB 版がんよろず相談システム等を活用し対応する工夫が必要であるなどの課題が明らかになった。

A. 研究目的

平成 19 年 6 月のがん相談支援センターを開設してから 1 年 6 ヶ月が経過した。

大分県は 5 つのがん診療拠点病院があるが、県南地区にはがん診療拠点病院がないなど、がんに関する情報も整備された状況ではない。そのような状況で、当院のがん相談支援センターでは、静岡県立静岡がんセンターの WEB 版がんよろず相談システム等を活用し、相談に応じている。

本研究では、当院でのがん相談の内容や活動状況を分析し、今後のがん相談支援体制への課題を明確にすることを目的とした。

(倫理面での配慮)

データは匿名化され、個人の同定は不可能である。

B. 研究方法

1. 対象及び調査期間

調査期間及び対象：平成 20 年 1 月～12 月までに受けたがん相談 342 件。

2. 調査方法：国立がんセンターのがん相談

談記入シートががん相談記入シートに基づきデータベース化し、EXCEL を用いて単純集計した。

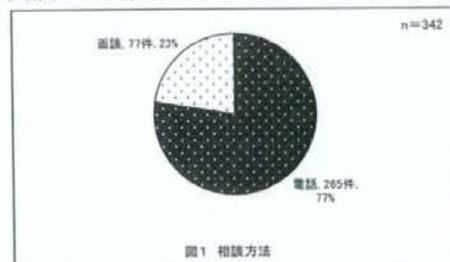
データベースの項目は、①年齢、②性別、③相談方法、④相談者、⑤疾患、⑥治療状況、⑦相談内容、⑧がん相談支援

センターを知ったきっかけ、⑨相談の評価等である。

C. 研究結果

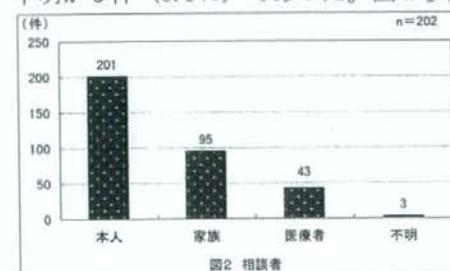
がん相談の件数は、総計 342 件であった。

相談方法では、電話が 265 件 (77.5%)、面談が 77 件 (22.5%) であった。図 1 参照。

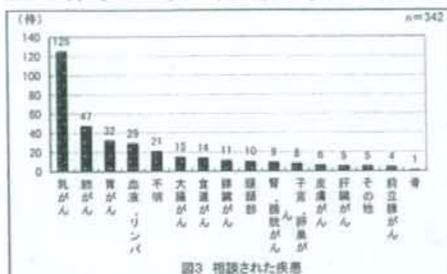


相談時間は電話が平均 10.8 分、面談が平均 20.8 分であった。

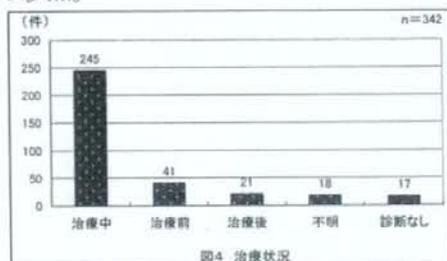
相談者は、本人が 201 件 (58.8%)、家族が 95 件 (27.8%)、医療者が 43 件 (12.5%)、不明が 3 件 (0.9%) であった。図 2 参照。



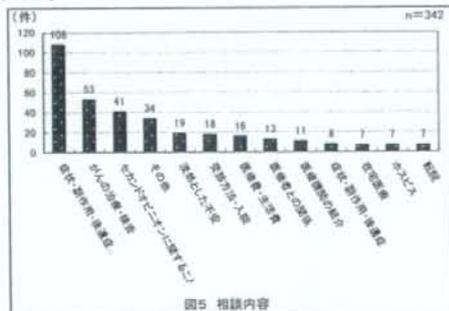
疾患別にみると、乳がんが125件(36.5%)、肺がんが47件(13.7%)、胃がんが32件(9.3%)、血液・リンパが29件(8.5%)の順に多い。図3参照。



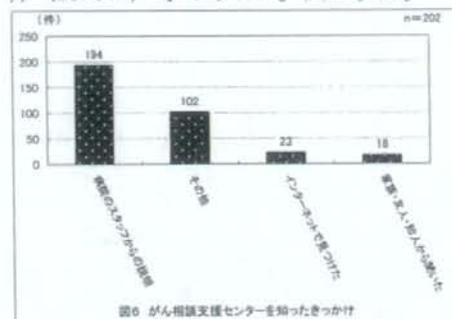
治療状況では、治療前が41件(14.9%)、治療中が245件(68.3%)、治療後/経過観察中が21件(14.3%)であった。図4参照。



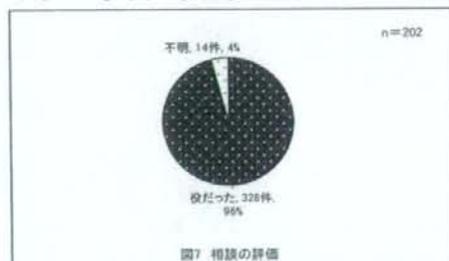
相談内容は、「症状・副作用・後遺症への対応」が108件(31.6%)、「がんの治療」が50件(14.6%)、「漠然とした不安」が19件(5.5%)、「受診方法・入院」が18件(5.3%)、「医療費・生活費」が16件(4.8%)、「医療者との関係」が13件(3.8%)等であった。図5参照。



がん相談支援センターを知ったきっかけでは、「病院のスタッフからの説明」が194件(56.7%)、「その他」が102件(29.8%)等であった。図6参照。



相談の評価では、「役立った」が328件(95.9%)、「不明」が14件(4.1%)であった。図7参照。



#### D. 考察

地域がん診療拠点病院においてがん相談支援センターを設置した目的は、院内外からの相談等に対応する機能を有し、相談者の困りごとや悩みに対処するためである。

今回の研究により、患者およびその家族は、がん診療に対しての情報や治療に対しての情報提供、転院への相談、医療者との関係への悩み、がん罹患に伴う不安などの多様な分野での悩み、不安を有していることが明らかになった。

相談内容の3割を占める「症状・副作用・後遺症への対応」は、化学療法を受けている患者・家族からの相談が多い。主に化学療法による好中球減少時の対応への不安やがんに伴う持続する疼痛や嘔気に対しての対処方法がわからない等の悩みが多かった。

今後は、今回の調査結果を院内のスタッフ全員で共有し、退院指導や外来での指

導に化学療法に対しての具体的な対処方法の情報を加えていくことが必要だと考える。

受診や治療選択時の情報不足に関するもの（病院選択への情報提供や治療法選択への迷い等）、医療者との関係への不満や悩み（医師の説明不足や治療に対する不満や医療者への態度への不満等）の相談も全体の25%を占める。医療者の説明は、患者や家族にとって分かり易い言葉ではなく、説明内容がわからないまま不安や不満を募らせていることが多いと考えられる。今後は、相談支援センターにおいて、地域医療機関の有する機能の明確化と情報提供、医療者の説明を分かり易い言葉で説明するなどの役割が増大してくると予想される。がん診療拠点病院同士で共同して地域の情報収集を行うなどの対策も必要である。

約9割以上の相談者が「相談が役に立った」と評価しており、がん相談は、相談者の困りごとや悩みに対しての主体的行動を促し、解決に貢献していると考えられる。相談に対してすぐに返答が出来ない場合に、相談に対しては解決の即時性が必要と考えられる。今後は、即時の返答が出来ない場合は、静岡県立静岡がんセンターのWEB版がんよろず相談システム等を活用し、同様の相談への返答例を参照するかWEBサイトの紹介を行う等の工夫が必要であろう。

#### E. 結論

1. がん相談支援センターには、がん診療に対しての情報や治療に対しての情報提供、転院への相談、症状・副作用・後遺症への対応、医療者との関係への悩み、がん罹患に伴う不安等多様な分野での相談が寄せられている。
2. がん相談支援センターでのがん相談は相談者の困りごとや悩みに対しての解決に役立っている。
3. がん相談支援センターで、情報提供への即時の対応のために、静岡県立静岡がんセンターのWEB版がんよろず相談システム等を活用する必要がある。

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

1) 増野浩二郎、野上真子、田代英哉、乳癌術後補助療法としてのTC(Docetaxel +Cyclophosphamide)療法の忍容性の検討、日本臨床外科学会雑誌、第69巻、11号：274712751、2008)

##### 2. 学会発表

1) 野上真子、増野浩二郎、秦陽子、田代英哉、第16回日本乳癌学会学術総会(2008.9.26-27、大阪)、脳転移で発見された潜在性乳癌の一例

2) 秦陽子、野上真子、増野浩二郎、田代英哉、第16回日本乳癌学会学術総会(2008.9.26-27、大阪)、赤外線観察カメラシステムによる蛍光法と色素併用によるセンチネルリンパ節蛍光測定法

3) 増野浩二郎、秦陽子、野上真子、田代英哉、第16回日本乳癌学会学術総会(2008.9.26-27、大阪)、65才以上乳癌患者における術後補助TC(Docetaxel /Cyclophosphamide)療法の安全性の検討

## 研究成果の刊行に関する一覧表

### 雑誌 (外国語)

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Kobayashi K, Yamaguchi K, et al.	Effects of socioeconomic factors and cancer survivors' worries on their quality of life (QOL) in Japan.	Psycho-Oncology	17	606-611	2008
M Miyashita I Adachi	Nurse Views of the Adequacy of Decision Making and Nurse Distress Regarding Artificial Hydration for Terminally Ill Cancer Patients: A Nationwide Survey	American Journal of Hospice & Palliative Medicine	24-6	463-469	2008
T Sato I Adachi	Effect of oral ketamine on neuropathic pain	Palliative Care Research	3-2	219	2008

### 雑誌 (日本語)

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
山口建	医学は科学, 医療は物語 - 理想のがん医療を目指して -	臨床血液	49	215-223	2008
山口建, 堀内智子	がん診療連携拠点病院の現状と課題	保健医療科学	57	318-326	2008
濃沼信夫	がん診療の医療経済学, がん薬物療法学, 基礎臨床研究のアップデート	日本臨床	67 増刊号	17-24	2009
佐々木常雄	がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第9回 患者はどのように最期を過ごしたいのか〜がん終末期医療のあり方を考える〜	エキスパートナース	24 1	174-175	2008
佐々木常雄	がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第10回 マニュアル時代の「型どおりの死」	エキスパートナース	24 2	182-183	2008
佐々木常雄	がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第11回 死の恐怖を乗り越える術	エキスパートナース	24 3	166-167	2008
佐々木常雄	がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第12回 死とは一魂は残る -	エキスパートナース	24 4	160-161	2008

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
佐々木常雄	がん化学療法のあり方 腫瘍内科医の立場から	癌の臨床	54 4	247-252	2008
佐々木常雄	都道府県がん・地域がん診療連携 拠点病院	日本臨床	67 増刊号 1	544-549	2009
永井宏和	ホジキンリンパ腫 がん薬物療法学—基礎・臨床研究 のアップデート—	日本臨床	67 巻 増刊号	764-770	2009
永井宏和	再発または難治性多発性骨髄腫 におけるレナリドマイドの役割	医薬ジャーナル	44 巻 7 号	113-118	2008
永井宏和	濾胞性リンパ腫—悪性リンパ腫 update in 2008	内科	102 巻 2 号	293-299	2008
岡田誠治、 永井宏和、他	エイズ関連リンパ腫の現状と治 療戦略	臨床血液	49 巻 10 号	206-214	2008
大野真司、他	がん診療にかかわる適切な情報 取得とコミュニケーション	medicina	45	1390- 1392	2008
大野真司、 大島彰	サージカルオンコロジストのた めのサイコオンコロジー	Pharma Medica	26	117-123	2008
大野真司、他	多職種から多施設へと広がる乳 癌チーム医療	CANCER BOARD 乳癌	1	51-54	2008
長井吉清、他	胃癌患者に対する病名告知のあ り方について-QOL からみた「仄め かし」と「病名のみ」の違いにつ いて-	日本癌治療学会誌	43 巻 第 2 号	466	2008
安達勇	がん化学療法における 緩和医療科医師の役割	ナーシング・ トゥデイ	23-12	58-62	2008
吉川栄省、 安達勇	終末期鎮静に関する倫理と 精神科医の役割について	総合病院 精神医学	20-3	272-278	2008
大田洋二郎	がん治療と口腔ケア がん治療における口腔ケアの 意義と歯科の役割	歯科臨床研究	5 (1)	109-111	2008
上野尚雄、 大田洋二郎	口臭のメカニズムとケアの選択	がん患者と対症療法	19 (2)	34-39	2008
大田洋二郎	終末期に直面する口腔症状に対 するケア	訪問看護と介護	3 (11)	892-896	2008
増野浩二郎、 野上眞子、 田代英哉、 他	乳癌術後補助療法としての TC 療 法の認容生の検討	日本臨床外科学会誌	第 69 巻	5	2008

書籍 (日本語)

著者氏名	論文 タイトル名	書籍全体の 編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
山口建、他 (「がんの社会学」に関する合同研究班)			がんよろず相談 Q&A 第5集 乳がん編②		静岡県	2009	
山口建、他 (「がんの社会学」に関する合同研究班)			学びの広場シリーズ⑥ 緩和ケアとは? (小冊子)		静岡県	2008	
山口建、他 (「がんの社会学」に関する合同研究班)			学びの広場シリーズ⑦ がんと上手につきあう方法 (小冊子)		静岡県	2008	
山口建、他 (「がんの社会学」に関する合同研究班)			学びの広場シリーズ⑧ 患者・家族のコミュニケーション (小冊子)		静岡県	2008	
山口建、他 (「がんの社会学」に関する合同研究班)			学びの広場シリーズ⑨ 痛みをやわらげる方法 (小冊子)		静岡県	2008	
山口建	がんよろず相談 (相談支援センター) の取り組みと役割	樋野興夫、 木南英紀 (編)	がん医療入門	朝倉書店	東京	2009	218- 225
山口建、他	がんの社会学— DPC時代の次に 何がくるのか?	グローバル ヘルス 研究所 (編)	ん医療の質に挑む DPC時代のチャレ ンジ	日本医学 出版	東京	2008	57-72
山口建、他	“がんの時代”に おける家庭医の 役割	片山壽 (監修)	地域で支える 患者本位の在宅緩 和ケア	篠原出版 新社	東京	2008	40-54
永井宏和	ホジキンリンパ腫	中川和彦	Cancer Treatment Navigator	メディカ ルビュー 社	東京	2008	206-207
山下浩介			がんに負けない! (小冊子)		北海道	2008	
安達勇、 吉川栄省、 他	緩和ケアチームの 経緯と活動 静岡県立静岡がん センター	森田達也 木澤義之 戸谷美紀	緩和ケアチームの立ち 上げ方・進め方	青海社	東京都	2008	14-16
小池眞規子	子どもは自分の死 をどう見つめるか —死に直面した子 どもたち	中根晃・牛 島定信・村 瀬嘉代子	子どもと思春期の 精神医学	金剛出版	東京	2008	105-110